

令和元年度 日本大学文理学部個人研究費 研究実績報告書

所属・資格 社会学科・助手

申請者氏名 畑山 直子

研究課題		I ターン移住者のイメージをめぐる社会学的研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	<p>本研究の目的は、大都市圏から係累のない地方圏へ移り住む I ターン移住者のイメージ（移住者像）の分析を通じて、日本社会における I ターン移住の理解の仕方を明らかにすることである。</p> <p>I ターン移住は、1960 年代の「思想的」な移住から、2010 年代の「ライフスタイル移住」あるいは「制度化された移住」へ、その様相を大きく変えつつある。このような移住の変化は、「異端者としての移住者」から「地域に貢献する移住者」への移住者の類型の変化として捉えることもできる。しかし、これらの変化は、時期ごとに単線的に進んだわけではなく、さまざまな移住者が混在しながら I ターン現象を形作ってきた。そこで、それらの様相を捕捉するために、本研究では I ターン移住者の生活史分析を通じて、移住者のイメージの変遷過程を考察する。</p>
	研究の結果	<p>埼玉県秩父地域で実施した I ターン移住者調査の生活史データを分析することで、以下の 2 点が明らかになった。</p> <p>第一に、2010 年前後の移住者は、1960 年・70 年代の移住者と連続性がある側面と、明確に異なる側面に、一定の傾向があることである。例えば、60 年代・70 年代の移住者たちの「思想」や感覚が通底している一方で、コミュニンを形成したり、「説教くさい」方法は避けようとする傾向があった。</p> <p>第二に、「地域おこし」を自己実現のツールとしたり、「地域の担い手」になることをとまどいながらも引き受けるなど、2010 年代の文脈にかなり依存していることである。</p> <p>以上から、I ターン移住者は、「異端者から地域の担い手」へとタイプが変遷したのではなく、少なからず異端者の側面を持ちながら、「地域の担い手」という要請に応えようとする存在であることが明らかになった。</p>
	研究の考察・反省	<p>I ターン移住者の生活史分析から、I ターン移住者の特性の変化を描くことで、イメージの変遷の一端を理解することができたが、予定していた I ターン移住関係の雑誌を刊行している出版社 3 社（宝島社、第一プロGRESS、農山漁村文化協会）へのヒアリングを実施することができなかった。これらのヒアリングは、I ターン移住者のイメージを「作る」側へのヒアリングであり、本研究の目的を達成するためには欠かすことのできない調査である。本研究内容は今後も継続していくので、出版社へのヒアリングは次年度の課題としたい。</p>
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所  研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	<p>※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。</p> <p><b>【研究発表】</b> 畑山直子、2019「I ターン移住者は『異端者』から『地域の担い手』になったのか」2019 年度日本大学社会学会大会（於日本大学）</p>	